

『オーバードール』

菊池涼太

あらすじ

大学四年生の別府智治(21)は教員を目指し、私立北岡高等学校の採用試験を受ける。試験の内容は、自身が転校生として高校三年生になり、その状況下でクラスメイトの、勉強へのモチベーションを上げられるかで判断される。潜入捜査、いや潜入試験という一風変わったものだった。

ある日、商店街で喧嘩を目撃した別府は、ヤンキーが多い学校に違いないと、気合を入れ転校するが、ごくごく普通の生徒達。戸惑いながらも、まずは寝ている生徒を起こそうとし、その生徒が喧嘩をしていた立川恭介(17)だと分かる。次の日から接近を試みるが、その日以降立川は登校してこなかった。話しかけてくれた鈴木文太(17)と仲良くなり、隣のクラスの南伊織(17)と米野裕子(17)、四人で遊びに行くことになる。高校生活に浮かれていた別府は、ある事件に巻き込まれる。町の不良達に襲われたのだ。そして立川も襲わ

れて入院している事、立川と関係があった奴らが狙われている事を知る。別府は向かい撃つ覚悟を決めるが、返り討ちに合い、文太まで入院させてしまう。病院を抜け出した立川と、ほぼ初対面の別府だったが、タバコを吸い交わし、二人で敵に挑む。なんと黒幕は同じ高校の生徒、しかも別府と同じく潜入試験を受けていた佐野ユウ(21)だった。

なんとか敵を倒した帰り道、それぞれの恋が揺れ動く。そして、もう一人潜入していた人物が居た。

登場人物

別府智治(21) 葛飾大学教育学部四年

川古史也(21) 別府の大学の友人

北岡高校

立川恭介(17) 三年

鈴木文太(17) 三年

南 伊織(17) 三年

米野裕子(17) 三年

武 航(16) 二年

佐野ユウ(17) 三年、生徒会

松下玄一(57) 校長先生

鳥越真美(30) 英語教師

田中(16) 殿見高校二年

相見(18) 町の不良

二階堂(18) 町の不良

バイト先の後輩(16) ばあちゃん(70代)

ミニ鉄道運転手(60代) 電車の車掌(40代)

○商店街・ファストフード店二階

別府智治(21)、コーラを飲んでいる。
遅れてやってくる川古史也(21)。

別府「あ」

川古「どうしたの急に」

別府「いやなんとなく」

川古「今日説明会でしょ？教員採用試験の」

別府「おう」

川古「どうだったの？」

別府「俺、大学でこっち来たからわかんない
んだけどさ」

川古「うん」

別府「この辺さ、ヤンキーとか多い感じ？」

川古「え、ちらほらとは居ると思うけど、そ
んなでもないと思うよ」

別府「ふーん」

川古「何だよ」

別府「じゃ何でだろ」

川古「よくわかんないけど、北岡高校が悪い
なんて聞いたことないよ」

別府「そっか」

別府、ハンバーガーとコーラを川古に渡す。

川古「センキュ」

川古、商店街を歩く北岡生を見つける。

川古「あれだよ北岡、学ランの奴」

別府「おー」

○商店街

立川恭介(17)、武航(16)と共に歩いている。

反対から殿見高校の田中(16)と、殿見生達が歩いてくる。

止まって睨み合う両者。

航「なんだコラ」

田中「あれ、立川さんじゃないですか」

航「立川さんこいつ殿見の田中ですよ」

立川「知ってるよ」

田中「ご存知だなんて光栄ですね」

航「何しに来たんだよ殿見の奴らが」

田中「掃除ですよ掃除。ボランティアが趣味
でしてね」

航「ほうほうえれーこった、その髪切って
ホウキにしてやろうかコノヤロー」

空き缶を捨てる殿見生1。

殿見生1「金魚のフンは黙ってろよ」

航「この」

航、行こうとするが立川に止められる。

田中「汚物をね、掃除しようと思って」

立川「拾え」

田中「あんたら見てると気分悪いんだよ」

立川「拾え」

田中「そんなに痛い目に合いたいですか？」

立川「最後だ、拾え」

田中「はー、忠告しましたよ俺」

立川、田中の話を聞かずにスタスタと
歩いていく。

田中「聞こえてないのかなー、便器に顔当て
て」

立川、殿見生1に右ハイキック、倒す。

田中「耳の穴にウオッシュレット・・・」

田中、振り返る。

田中「・・・」

立川「最後って言ったよな」

田中「え、え」

立川、田中の胸ぐらを掴む。

立川「耳の穴がなんだ」

田中「え、いや、あの」

立川「脳みそまで聞こえるように、かっぽじ
ってやろうか」

田中、宙に浮く。

田中「ち、違うんです。い、今から、そいつ
に拾わせようと」

航「久々にあれが」

立川「いくぞ」

田中「や、やめ、やめてくだ、さい」

田中、お漏らしする。

○（戻って）同・ファストフード店二階

別府と川古、氷だけになったコーラを

吸い続けている。

川古「・・・言うてさ、教師になってから考
えればいんじゃないね」

別府「その教師になる為に考えなきゃいけない
んだよ」

川古「は？」

航の声「はいそこ、しっかり」

ズボンが体操着の田中と、殿見生達が
商店街を掃除している。

航の声「ボランティアは趣味じゃなくて気持
ちだろーが」

○北岡高校・正門

『私立北岡高等学校』の表札。

○同・駐輪場

生徒達がやってくる。

生徒1「久しぶり」

生徒2「ねー久しぶり、春休み一回も会わな
かったね」

生徒 1 「うちら仲悪い？」

生徒 2 「かもね」

○同・廊下

生徒達が喋っている。

生徒 3 「やば、もう三年じゃん」

生徒 4 「一年に可愛い子入ってくるかな」

生徒 3 「なんか転校生来るらしいよ」

生徒 4 「マジで？男？女？」

生徒 3 「俺が聞いた話だと」

○葛飾大学・中庭

川古、ベンチに座っている。

携帯にメッセージが入る。

画面には『しばらくの間姿をくまらず、
捜さないで下さい』と。

川古「別府のやつ、何考えてんだか」

○北岡高校・階段

別府、北岡の制服を着て歩いている。

別府「ふー」

○（回想）北岡高校・会議室

別府、個別式の教員採用試験説明会を受けている。

校長先生の松下玄一（57）、向かいに座っている。

別府「どういうことですか？」

校長「我が校の三年生になってもらいます」

別府「えっと、それは」

校長「転校生として、高校三年生の一学期を共に過ごしてもらいます」

別府「・・・つまり」

校長「その状況下で、生徒達の勉強へのモチベーションを上げられれば合格です」

別府「・・・え？」

校長「潜入捜査、いや、潜入試験といった所ですかね」

○北岡高校・廊下

別府、歩いている。

別府 M「こないだの喧嘩、ヤンキーだらけの学校に違いない。舐められたらやられるぜ」

3年1組の前に、英語教師の鳥越真美(30)が立っている。

鳥越「来た来た、あれ、雰囲気変わったね」

別府、無視して勢いよく教室に入る。

鳥越「あ、ちよっと」

○同・3年1組

別府、黒板に名前を書いて、教壇の机を叩く。

別府「転校生の別府智治、夜露死苦！」

生徒達「・・・」

ごくごく普通な生徒達。

別府「・・・」

鳥越「別府君緊張してるのかな、みんなよろしくね」

別府「あれ？ヤンキーは？」

ざわざわしている生徒達。

鈴元文太(17)、立川に話しかける。

文太「恭介、なんか面白そうな奴入ってきたね」

立川「ん、ああ」

タイトル『オーバーブルー』

○北岡高校・3年2組

南伊織(17)、生徒1と喋っている。

生徒1「伊織、1組に変な人転校してきたってよ」

伊織「どんな人？」

生徒1「めっちゃ気合入ってるらしいよ」

伊織「そうなんだ」

生徒1「ヤンキーとか怖くない？っていうか

ダサイよね」

伊織「・・・そうだね」

生徒1「じゃまたねー」

伊織「うん、またね」

生徒1、教室を出ていく。

伊織「もうこんな時間、バイト行かなきゃ」

伊織、帰り支度をする。

○通学路

別府、下校している。

別府M「こういう事だよ、恥ずかしすぎてホームルーム終わってすぐ帰ってきちゃった」

○駅前（夜）

コンビニの前にたむろしている不良がいる。構わず通り過ぎる立川。

○ピザ屋（夜）

伊織、バイトしている。

文太、デリバリーから帰ってくる。

文太「ゲロゲロー」

伊織「お疲れ様」

文太「お疲れ」

伊織「今日忙しかったね」

文太「んどだよ、もうちょっと春休みの余韻に浸りてーよ」

伊織「はいこれ次です」

文太「まだあったんかい」

伊織「転校生変わってるらしいね」

文太「そうなんだよ。面白そうな奴でさ、話しかけようとしたけど、すぐ居なくなちゃって」

伊織「うん」

文太「いきなし『よろしく』とか言って全員にメンチきっててさ」

伊織「うん」

文太「立川には喧嘩売るなよって忠告しようとしたら」

伊織「ねえ」

文太「うん？」

伊織「ピザ冷めちゃう」

文太「聞いてきたから」

伊織「冷めちゃうよ」

文太「・・・頑張りマンモス」

伊織「いってらっしゃい」

○別府宅（朝）

別府、着替えている。

別府「こうなったらもうこれでいくしかねー
ぜ」

別府、部屋を出ていく。

閉まるドアに、外国人のセクシーなポ
スターが貼ってある。

ポスターには『死ぬまでに一回は金髪
美女』の文字。

○北岡高校・3年1組

英語の授業中。

別府M「懐かしいなーこの感じ、タイムスリ
ップしたみたいだ。にしても静かだな、特
に問題なさそうだけど」

別府、斜め前の立川が寝ているのが目
に入り、

別府 M 「なんで注意されないんだこいつ」

鳥越先生、一切注意しない。

別府 M 「は！ もしや、試されているという事なのか」

別府、鳥越先生と目が合った気がする。

別府 M 「勉強へのモチベーションか、なるほど。鳥越先生、可愛い顔してやるじゃねーか」

別府、立川を起こそうとする。

隣の席の文太、それを止める。

文太 「おい、やめろよ」

別府 「え？」

文太 「いたずらすんなよ」

別府 「違う、起こそうとして」

文太 「いたずらしていいの俺だけだぞ」

別府 「なんだよそれ」

鳥越 「その二人、静かにしてください」

文太 「はい」

別府 「・・・」

立川、起きて後ろに振り返る。

立川「うるせーぞ文太」

文太「わりいわりい」

別府、立川の顔を見て立ち上がる。

別府「あー！」

生徒達「・・・」

別府「お前、あんどき商店街で」

鳥越「うるさーい！」

× × ×

授業は終わり休み時間。

別府、鳥越先生に叱られている。

鳥越「まじめに勉強している人の邪魔をしな

い、わかった？」

別府「はい」

鳥越「よし」

別府「あの先生」

鳥越「なに」

別府「寝てる人には注意しないんですか」

鳥越「転校してきたばっかで知らないか」

鳥越、黒板の上に飾ってある校風を指さし、

鳥越「うちの学校の校風は自由と個性、周りに迷惑をかけなければおっけーなの」

別府「・・・これも時代か」

鳥越「別府君で高校生じゃないみたいね」

別府「え？知らないんですか？」

鳥越「何の事？」

別府「だって」

別府、教室のドアから顔を出して覗いている校長先生と目が合う。

鳥越「どうしたの？」

別府「何でもないです、じゃ」

○同・男子トイレ

別府、用を足している。

別府「校長先生以外誰も知らねーのかよ」
隣に来て用を足す文太。

文太「よう別府」

別府「あ、えーと」

文太「鈴元文太、文ちゃんって呼んでいいぞ」

別府「お、おう」

文太「お前おもしれーな」

別府「文ちゃんも」

文太「いける口だね」

○同・廊下

別府と文太、歩いている。

文太「立川と知り合いなの？」

別府「あの寝てたやつ立川って言うんだ」

文太「そうそう」

別府「商店街で喧嘩してるの見かけてさ」

文太「あいつしょっちゅう喧嘩してるからね」

別府「やっぱヤンキーなんだ」

文太「しいていうならば」

別府「でも他はみんな良い子そうだよね」

文太「まあね、ってか留年でもしてんの？良

い子そうってタメじゃん俺ら」

別府「そうだよね、ごめんごめん」

文太「ちよっと老けてる様に見えてきた」

文太、別府をじっと見る。

伊織と米野裕子(17)、前から歩いてくる。

文太「おう伊織、こないだ言ってた転校生の」

伊織「別府君」

文太「そうそう、あれ」

伊織「裕子。ずっと休んでた、んだよね？」

裕子「うん、入学してすぐ身体の調子崩しちゃって、ずっと休んだの」

文太「そういえば居たかも」

裕子「でしょでしょ？伊織まったく覚えてないだもん」

伊織「ごめん」

別府「初めまして別府です」

米野「初めまして米野裕子です」

○同・3年1組

立川、座っている。

生徒2が近寄ってきて、

生徒2「立川君、掃除当番でしょ？手伝って」

立川、立ち上がる。

すかさず生徒3がきて生徒2に、

生徒3「（小声で）おいバカ、手伝うわけねー
だろ」

立川「・・・」

生徒3「あ、大丈夫でーす」

生徒2と生徒3、掃除を再開する。

立川、教室を出ていく。

○商店街

別府、下校している。

別府M「高校に潜入ってことは、その間大学
に行かなくても済む、ある程度単位を取っ
ているという事が大前提。そして個性が尊
重される校風の中で、成績ではなくモチベ
ーションを上げられるかでの判断。あの校
長、なかなかやり手だぜ」

物音が聞こえる。

別府「なんだ？」

○同・脇道

立川と航、立っている。

その前に3人倒れている。

航 「最近多いっすね」

立川 「こいつら知ってるか？」

航 「いや、分かんないです」

立川 「そうか」

航 「立川さんの噂、聞きつけて来たんじゃないんすか」

立川 「・・・行くぞ」

航 「うっす」

○（戻って）商店街

別府、去っていく立川と航を見ている。

別府 「3人相手に、すげーな」

別府、歩きだす。

佐野ユウ（1）と肩がぶつかる。

佐野 「あ、ごめんなさい」

別府 「すみません」

佐野、すぐに去っていく。

別府「北岡の制服・・・まいったか」

別府、再び歩きだす。

別府「俺のクラスで寝たりするのは立川のみ、この潜入試験の傾向と対策からして、立川に近づく事が合格への方程式だ」

別府M「4年長く生きてるだけあって、ヤンキー見てもビビらなくなってきた。いける、いけるぞ別府」

○公園

伊織と裕子、シーソーに横向きで乗っている。

裕子「相場はブランコじゃない？」

伊織「そうかな？」

裕子の方が下がっている。

裕子「地味にマウンととられてる気がする」

伊織「やっぱ思いだせない裕子の事」

裕子「え？もういいよ」

伊織「私が色々教えてあげる」

裕子「うん、ありがと」

伊織「勉強はどうしてたの？」

裕子「基本的には提出物をやってなんとか」

伊織「そっか」

裕子「・・・高校生って楽しいね」

伊織「なにそれ」

○ピザ屋（夜）

文太、バイトしている。

文太「配達いつてきまーす」

○駅前（夜）

コンビニの前にたむろしている不良が
いる。構わず通り過ぎる立川。

○電車・車内（夜）

立川、座っている。不良達が乗ってき
て囲まれる。

立川「わりいな、年寄りにしか席譲らねえよ」

不良1「あらあら」

不良2「わしら耳が遠くてのう」

不良 1 「逃げ場なんてねえぞコノヤロー」

電車のドアが閉まる。

不良達、立川に襲いかかる。

立川、一人ずつ倒していく。

次々に出てくる不良達。

立川 「さすがに多いな」

立川、隣の車両に移動しようとするが、そこからも不良がくる。移動できないが、それでも圧倒的な強さで倒してく。残り数人の所で後ろから抑えつけられ、もう一人に窓の隙間から拳を出されて、地下鉄の壁と擦り合う。

立川 「あああああ」

電車の窓に血が飛び散る。

立川、なんとか振り払い、全員を倒して次の駅で降りる。

立川 「くっそ」

立川、血を垂らしながら出ていく。

○道・交差点(夜)

立川、歩いていてライトが当たる。次の瞬間、車に轢かれる。

○道（夜）

文太、デリバリー中、通行止めになつていて、

文太「抜け道が使えない、誰だよったく」

文太、迂回する。

○別府宅（朝）

別府、ドアを叩く音に目を覚ます。

別府「誰だよこんな朝っぱらから」

○同・玄関

別府、ドアを開ける。

川古が居て、

川古「よっ」

別府「なんだよお前かよ」

川古「なんだよじゃねーよ、あんなメッセー

ジよこしやがって」

別府「まあちよつとな」

川古「本当に大学来なくなるから心配すんじゃないかよ」

別府「わりい、時期がきたらちゃんと話すわ」

川古「今度、足立大学の子と合コンあるけど」

別府「マジで？」

川古「おう、四対四で」

別府「う」

川古「次の金曜」

別府「う」

○北岡高校・3年1組

別府と文太、弁当を食べている。

文太「別府いっつも買い弁だな」

別府「一人暮らしだし作んのダルくて」

文太「え、一人暮らししてんの？」

別府「ん？いや、うち共働きで作る時間ないんだってさ」

文太「なるへそ」

別府「そんなことより立川は？今日休み？」

文太「そーいや見てねーな」

伊織と裕子、やってくる。

伊織「ねえ今度さどっか行かない？」

裕子「皆で行こ」

文太「いいね」

伊織「別府君と裕子の歓迎会」

文太「おっけー、行くっしょ？」

別府「おう」

文太「いつにしょっか？」

伊織「金曜とかは？放課後」

文太「たまたま空いてる」

伊織「二人とも大丈夫？」

裕子「うん全然平気。別府君は？」

別府「おう、大丈夫」

伊織「あれ立川は？」

文太「今日来てないんだよね」

伊織「そっか」

裕子「立川君も誘って皆で行こうよ」

文太「今度会ったとき言っとく」

別府 M「やばい、高校生楽しいー」

○北岡高校・購買前

生徒達で溢れている。

○同・踊り場

裕子、下を向く別府にパンをあげる。

○同・体育館

体育の授業中。

別府「なんでシャトルランなんてやんなきゃ
いけないん」

別府、体育館の下窓から覗いている校
長先生と目が合う。

○同・美術室

美術の授業中の3年2組

別府と文太、廊下から見ている。

別府「てかさ米野さんて可愛くね」

文太「俺も思ってた」

別府「大人っぽいよな」

文太「高１の時の俺の嗅覚はどうなってたんだ」

○同・３年１組

数学の授業中。

別府、問題を解き褒められている。

裕子、廊下から見ている。

裕子「勉強できるんだ」

○同・廊下

別府と文太、キャッチボールしている。

伊織の持っている飲み物に当たり、伊

織と裕子の制服が汚れる。

別府と文太、逃げる。

伊織と裕子、追いかける。

○北岡高校・３年１組

別府と文太、話している。

別府「立川あれから来てねーな」

文太「どこほつつき歩いてんだか」

佐野、やってくる。

佐野 「立川君は今日も休み？」

文太 「ん？佐野か、そうだよ」

佐野 「そうか」

別府 「あ」

佐野 「別府君だよ、あの時急だったから、
挨拶できなくてごめんね」

別府 「こちらこそ」

文太 「なんで立川？」

佐野 「生徒会として一応気になってね、それ
じゃ」

佐野、去っていく。

伊織と裕子、やってくる。

伊織 「お待たせ」

別府 「お疲れ」

文太 「立川連絡しても返事ねーわ」

裕子 「しょうがないね、また今度にしよ」

伊織 「・・・うん、そうだね」

○葛飾大学・食堂

川古の携帯にメッセージ。

川古「は？」

大学生1「で今日の事なんだけどさ」

川古「別府来ないって」

大学生2「え？嘘でしょ？」

川古、携帯のメッセージを見せる。

画面には『そういうのもういいわ』の

文字。

大学生2「別府のやろー」

大学生1「やば、メンバーどうする？」

大学生2「何だよマジで」

大学生1「とりあえず他当たってみる」

○道

伊織と裕子、少し後ろに別府と文太、

四人で歩いている。

別府M「あー高校生に戻りてー」

文太「早く大人になりてー」

別府「え」

文太「こっちの話」

裕子「（振り返り）行こ」

○アイスクリーム屋・外

別府と裕子、文太と伊織、座ってアイスを食べている

文太「もうちょっとつめて」

伊織「おいしそう少しちょうだい」

裕子「いいよ、そっちもちょうだい」

文太「聞いてねえし」

伊織、立ち上がる。

伊織「それよりこの辺に遊園地なんて本当にあるの？」

別府「遊園地？」

文太「こないだ見つけたんだよ」

○交通公園・入口

別府と裕子、文太と伊織、立っている。

裕子「せっかくだし、入ろうよ」

別府「ここまで馬鹿だとは」

伊織「子供からしたら遊園地かもしれないけ

ど」

文太「高校生はまだ子供だろ」

伊織「はあ？」

伊織、受付に歩いていく。

伊織「大人四人お願いします」

○同・園内

乗り物に乗る四人。

子供達と一緒に手を上げて、横断歩道を渡る四人。

遊具で遊ぶ四人。

○アイスクリーム屋・外

前を通り過ぎる不良達。

○（戻って）交通公園・園内

園内放送が流れる。

放送「えーもうまもなく鉄道が発車します。

乗る子は切符を買ってください」

伊織「やばい、みんな早く」

文太「よし」

別府「一番乗り気じゃん、大丈夫？」

裕子「うん、乗ろう」

○同・改札

切符を切る四人

伊織「子供たちまだ来てないみたい、裕子先

頭行くよ」

裕子「待って伊織」

別府「結構本格的だな」

文太「出発進行」

○同・鉄道（走行中）

乗っているのは運転士と四人だけ。

別府「俺らだけじゃねーか」

子供達の声「あれもう飽きたよね」

「塾行かなきゃ」

「帰ろー」

「またねー」

文太「・・・いいお天気ですね」

別府「お見合いか」

別府と文太、裕子と伊織の方を見る。

伊織「思ってたよりスピード出るね」

裕子「すごい、楽しいかも」

ミニ鉄道、陸橋をくぐる。

最後方の別府、上に姿を消す。

文太「結果オーライだな別府」

文太「別府？」

文太、横から殴られ線路脇に消える。

裕子「さらに早くなった」

運転士「何か軽くなったかな」

伊織と裕子、後ろを見る。

裕子「あれ二人は？」

伊織「あそこ！」

別府、陸橋の上で不良達に殴られてい
る。

裕子「こっちも！」

文太、芝生の上で不良達に殴られてい
る。

伊織「どうなってんの？！」

○同・文太サイド

文太、殴り返す。

文太「どうなってんだよ！畜生」

文太、走る。

不良達、文太を追いかける。

○同・別府サイド

別府、殴り返す。

別府「なんだよこれ」

別府、陸橋から降りる。

不良達、別府を追いかける。

○同・文太サイド

文太、なんとかしのいでいるが、不良

3に捕まり、線路に頭を押さえつけら

れる。

文太「くそ」

○同・別府サイド

別府、不良数人を倒し、なんとかの
いでいる。

別府「文太―！」

別府、文太を助けに行こうとするが、
行かせてもらえない。

○同・文太サイド

文太、対抗しているが起き上がれない。

○同・鉄道（走行中）

裕子と伊織、乗っている。

裕子「ちょ、やばいよ！」

伊織「運転士さん早く止めて！」

運転士「今やってます！」

○同・別府サイド

別府、不良4に捕まり動けない。

不良4「二階堂さんは甘くねえぞ」

別府「うるせえんだよ、文太！」

○同・文太サイド

文太、未だに起き上がれない。

迫る鉄道、乗っている伊織のスカートがめくれる。

文太「うおおおお！」

文太、不良3を蹴り飛ばし起き上がる。

鉄道が通過する。

別府、少しして文太に合流。

別府「大丈夫か？」

文太、サムアップ。

別府「はあ？それよりなんだこいつら」

不良3「そ、相見さんが、黙ってねえぞ」

別府「お前らが仕掛けてきたんだろうが」

文太「とりあえず、ドロンしようぜ」

○同・鉄道（停止中）

伊織と裕子、心配そうに二人を見つめる。

○病院・病室

立川、呼吸器と心電計をつけてベッドに横になっている。

航、見守っている。

航 「立川さん」

○道（夜）

別府、裕子を送っている。

裕子 「ケガ大丈夫？」

別府 「おう」

裕子 「喧嘩強いんだね」

別府 「そんなことねえよ」

裕子 「そっか」

別府 「家遠いね」

裕子 「うん、でもすぐそこだからここまでで

いいよ」

別府 「家まで送るよ」

裕子 「ケガしてるんだから早く帰りなさい」

別府 「・・・分かった」

裕子 「バイバイ」

○文太宅・前(夜)

航、待っている。

帰ってくる文太。

文太「あれ、航じゃん」

航、会釈する。

○公園(夜)

文太と航、ブランコで話している。

航「立川さん今、入院してるんです」

文太「え、なんで？」

航「車に轢き逃げされて、意識不明です」

文太「はあ？　どういことだよ」

航「自分にもわかんねーっす！　右手なんて

骨が見えるまでえぐられてて」

文太「・・・俺らも今日襲われた」

航「え」

文太「別府もいたからなんとか、あいつ喧嘩強いのかな。でも女子もいたからよ、最悪だ」

航「実は殿見の田中もやられたみたいで」

文太「あいつ2年だけど、殿見で一番強いっ

て聞いたぞ」

航 「会って話聞いたんです、そしたら」

○（回想）病院・病室

田中、ベッドに横になっている。

田中 「立川の知り合いかって聞かれて」

航 「立川さん？」

田中 「俺の舎弟だって言ったらこのザマだ」

航 「・・・」

田中 「手段は選ばねえ奴らしい。特に、二階堂と、相見だ」

航 「ありがとよ、立川さんのこと舎弟って言ったことは見逃してやる」

○（戻って）公園（夜）

文太と航、話している。

航 「・・・文太さんはともかく、その転校生の別府さんはどうして？」

文太 「知らねえよそんなこと」

航 「ちよつとでもそう感じたら、潰そうと

してるのかもしれないです」

文太「くそ、知ってる奴いなかったけどな」

航「立川さんまでやられたんです、気を付けてください」

文太「・・・お前もな」

航、去っていく。

○月空の下

文太、ブランコに乗っている。

裕子、部屋の窓から月を見ている。

伊織、部屋の窓に映る自分を見る。

別府、帰っている。

別府「何してんだろ、俺」

○北岡高校・3年1組

別府と文太、話している。

文太「恭介入院してるって」

別府「え！マジかよ？」

文太「うん、不良集団に襲われて、終いには車に轢かれたって」

別府「なんで？ どうして？」

文太「・・・」

別府「俺あいつが居ねーと困るんだよ」

別府M「いやまてよ、立川が入院してくれれば、寝る奴もいない。試験としては合格なんじゃ」

文太「俺だってそうだよ！ いたずらする相手居なくなっちゃうじゃねーかよ」

別府「でも自分で撒いた種なんじゃ」

文太「あいつは自分から喧嘩しかけるような奴じゃないんだ」

別府「え？」

文太「でもあーゆー風貌だから、よく喧嘩売られてよ、その度に相手ボコボコにしていたから、逆恨みしてる奴も居るかもしれねえ」

別府「・・・」

文太「前に喧嘩したことある、他校の奴もやられた」

別府「それって」

文太「完全に恭介と関わりがあつた奴らが狙われてる」

別府「また来るぞ」

文太「・・・喧嘩とかこえー、こないだはさ、俺の中の狼が吠えたからよかったけど、まだ身体いてーよ」

別府「制服着て、目立つ所でウロチョロしてればいんだろ」

文太「別府もそこそこ喧嘩強いのかもしんねーけど、相手は車で轢き逃げするような奴らだぞ」

別府「答えが合っても、途中式が間違つてたら意味ねーんだよ」

文太「は？なんだよそれ」

別府「いいからお前は休んでろよ文太」

別府、出ていく。

文太「・・・」

○同・下駄箱

裕子、別府の元に駆け寄って、

裕子「一緒に帰ろ」

別府「やだ」

裕子「明日さパフェ食べに行こうよ」

別府「明日はダメだ」

裕子「じゃ明後日は？」

別府「・・・恐くねーの？」

裕子「平気だよ、ちよっとビックリしたけど」

別府「・・・また今度な」

別府、去っていく。

裕子「・・・」

○病院・病室（夜）

伊織、立川の傍にいる。

文太、廊下から二人の様子を見ている。

文太「頑張りマンモス」

○コンビニ（夜）

別府、酒を買おうとレジに、

別府「気合入れるか」

店員「すみません未成年の方には・・・」

別府「え、21です」

店員「・・・制服着られてますけど」

別府、自動ドアのガラスに映る自分を見る。

別府「あ」

川古、自動ドアから入ってくる。

川古「え」

別府「あ」

川古「・・・別府？」

○別府宅（夜）

別府と川古、酒を飲んでいる。

川古「そういうことか」

別府「これを聞いてしまった君の身も危険だ」

川古「はいはい」

別府「君を巻き込むつもりはなかった」

川古「なんだそれ、女子に言えよ」

別府「・・・」

川古「別府まさか、女子高生のこと気になつてたりしてないよな？」

別府「気になってねーよ、ただちよつと良い
なつて思つてるだけだよ」

川古「気になってんじゃねーかよ」

別府「だって可愛いんだもん。あそうだ目
立つ場所だ、この辺で目立つ場所って何処
だ？あとこないだの合コンどうだった？」

川古「落ちつけて」

別府「何処でどうなったんだよこの野郎、女
の子とイチャイチャしやがって」

川古「してねーよ合コン、中止中止」

別府「え」

川古「変わり見つかなくて、向こうも一人
来れないっていうから、今回は中止にしよ
うつてなつて」

別府「っしや」

川古「はあー、俺がどんだけの情報網を駆使
して足立大学の子と知り合つたと思つて
るんだよ」

別府、寝ている。

川古「・・・潜入つてストレス溜まんのな」

○同（朝）

別府、目覚める。

別府「うつ、頭いてー」

川古の姿はない。

テーブルにタバコと置手紙が、

別府「ん？」

置手紙には『駅前のゲーセンなら人い
っぱいいるよ、これ餞別』と。

別府「・・・とりあえず水飲も」

○ゲームセンター・店内

別府、UFOキャッチャーをしている。

別府「よし」

別府、横に移動しアームの奥行を確認
していると、向かいのガラスに顔を押し
付けている文太の姿。

別府「ビックリした」

文太「おっす」

別府「何してんだよ」

文太「気付いてくれるの待ってた」

別府「こわ」

文太「今日の俺、マインドがマンモスだから
一つよろしく」

女性の声「きゃっ」

相見(18)と二階堂(18)、近づいて来る

別府「来たぞ」

文太「わーお」

別府「おそらく相見と二階堂だな」

文太「静かでいいね」

相見「あー居た居たー、帰っちゃうかと思っ
て急いで来たよ」

二階堂「お前、車の、運転、荒い」

相見「しょうがないじゃーん、ボンネットへ
こんじゃって見えづらいんだもん」

別府「・・・」

止まって睨み合う両者。

文太「あんたらか、恭介やったの？」

二階堂「立川とつるんでる、鈴木文太、別府
智治、だな」

文太「だからどうした？」

別府「これからつるむ予定だったんだよこの

野郎」

相見「まーそのね、よくわかんないんだけど」

別府「あ？」

二階堂「邪魔だ」

二階堂が別府に、相見が文太に、襲いかかってくる。

○病院・病室

カーテンの中が少し騒がしい。

○ゲームセンター・別府サイド

別府、襲われた勢いでUFOキャッチ

ヤーのボタンを押す。

アームが下がっていく。

二階堂、別府を抑えつけて離さない。

別府「こいつ、力が」

別府、二階堂に持ち上げられる。

二階堂「ん？小さいな、チェリーか、こいつ」

別府、二階堂に投げ飛ばされ、バスケットゲームのネットに頭から入る。
UFOキャッチャーの人形が取れる。

○同・文太サイド

文太と相見、喧嘩している。

相見「こいつ弱いじゃん」

文太「うるせえな、家に帰ってなニワトリ頭」

文太、劣勢。

別府の声「文太逃げろ！」

文太「え？」

文太、二階堂に後ろから抑えられる。

文太「離せこら」

相見「もう終わったのそっち」

二階堂「ふん」

相見「おーナイススリーポイント」

○同・バスケットゲーム

別府、なかなか抜け出せない。

別府「くそ、抜けね。文太——！」

○同・文太サイド

文太、身動きが取れない。

文太「メンタルもマンモスにしとくんだったぜ」

相見、近づいて来る。

相見「うるせえ文鳥だな」

別府の声「やめろー！」

相見、文太に右ストレート。

文太、倒れる。

店員の声「お巡りさんこっちです」

相見「ちっ、行くよ二階ちゃん」

二階堂「ふん」

相見と二階堂、警察官から逃げていく。

警察官「大丈夫か君？」

文太、気絶している。

警察官、無線で話す。

警察官「はい、先ほどの交通違反の二人だと思われます。駅南口方面に逃げました」

別府、やっと文太の元に辿り着く。

別府「おい文太！しっかりしろ！」

○同・駐車場（夕）

別府、縁石に座っている。

別府「一人でどうすりゃいんだよ」

○病院・病室

機械の、緊急の音が鳴り響く。

○通学路（朝）

伊織と裕子、通学中。

裕子「立川君どうだった？」

伊織「重症だって」

裕子「心配だね」

伊織「うん」

相見と二階堂、不良達が目の前に、

伊織、二階堂に腕を掴まれる。

裕子「ちょ、何すんのよ」

相見、バットを裕子の喉仏にやる。

相見「騒がなきゃなんもしねーよ」

伊織「裕子に何するの、離して」

二階堂「伊織にビンタする。」

二階堂「だまれ」

相見「おとなしくしてろよ」

伊織と裕子、連れていかれる。

○道（朝）

航、連れていかれる伊織と裕子を目撃する。

航「あれは立川さんの見舞いに来てた」

航、絡みにいく。

航「おいてめえら、なにしてんだ」

二階堂「誰だ、お前」

相見「あれ、北岡の制服着てんじゃない」

航「北岡高校二年、武航だコノヤロー！」

伊織「・・・無理すんなよ」

航「黙ってて下さい」

裕子「・・・」

相見「あーあの、立川の金魚のフンか」

二階堂「顔が、うんこ、みたい」

相見 「ははは、でなんの用？」

航、腕時計やネックレスに目がいく。

航 「ずいぶん高そうなもん身に着けてんじやねーか」

二階堂 「だから、どうした？」

相見 「俺ら働いてっからさ」

航 「お前らが立川さんを」

相見 「だったらどうすんの？」

航 「二人を放せ」

二階堂 「そんなこと、言っていないのか？ 容赦しねーぞ」

不良達、伊織と裕子にくつつく。

相見 「まー待てよ、やっぱり女だと気が引けちゃってよ、優しいなー俺も」

二階堂 「優しい、のか」

相見 「こいつなら片目ぐらい潰しても」

航 「・・・」

○お好み焼き屋・中

航、投げられ、ガラスを割って中に入

つてくる。もうすでにボコボコ。

相見と二階堂、入ってくる。

相見「おらおらどうした！北岡こんなもんか！」

航「お、お前らなんかに、立川さんが、やられるわけねーだろ」

相見「今どこで何してんの立川」

航「・・・てめえ、どうせ卑怯な手使ったんだろ、バカヤロー」

航、相見に唾を吐く。

相見「カッチーン、あーダメだもう」

相見、二階堂に目をやる。

二階堂、鉄板のガス栓からホースを抜き、航の口に突っ込む。

相見、ライターを航の鼻の穴に持っていき、

相見「片目だけじゃ満足できないわー、なあ」

二階堂「鼻と口、どっちも」

相見「どっちも焼いてやるよ」

航「あああ、あああ、あゝ、あ」

航、気絶する。

相見「けっ、根性ねーな」

○道・交差点

ばあちゃん（七十代）、買い物袋を落とし、みかんが転がる。

車にクラクションを鳴らされる。

立川、通りがかりみかんを拾い、車にメンチ切る。

車、逃げていく。

立川「はい」

とみかんを渡す。

ばあちゃん「ありがとうね」

別府、通りがかる。

別府「あ、立川じゃねーかよ」

立川「・・・」

別府「お前こんなとこで何してんだよ、つか大丈夫なのか？」

立川「お前誰だっけ？」

別府「まあそうだな、転校してきた別府智

治だ」

立川「あの面白い奴か」

別府「昨日文太がやられた」

立川「え？」

別府「最近つるんで一緒に居たんだ」

立川「・・・誰にやられた？」

別府「相見と二階堂って奴ら、おそらくお前をやったのも」

田中の声「立川さん！」

田中、松葉杖で歩いている。

立川「田中か、俺そんなにボコボコにしたっけ？」

田中「さっき三丁目で、航があいつらと」

別府「あいつら？」

田中「二階堂と相見っす」

立川「航が一人で？」

田中「あいつ、震えてました」

立川「わかった」

別府「俺も行くぜ、目の前で文太を病院送りにされたんだ、黙ってられねえ」

立川「・・・行くぞ別府」

別府「おう、くそあいつら」

別府、田中の松葉杖をへし折る。

立川と別府、走っていく。

田中、取り残される。

田中「へし折らなくても」

○お好み焼き屋・中

別府と立川、入ってくる。

立川「おい！どうした航？」

別府「しっかりしろ」

航、目覚める。

航「い、息が」

立川「ん？」

航「が、ガス、吸わさ、れた」

別府「そーいやガスクせえな」

航の携帯が鳴る。

航、音を頼りに携帯を探す、手
きない。

航「だ、だめだ、み、見えない」

別府「くそっ、やりすぎだろあいつら」

立川、代わりに電話にでる。

立川「何だ」

相見の声「もしもーし、どうですか調子は？」

立川「最悪だよ」

相見の声「あれもしかして立川？死んでなかったのね、よかったよかった。ってことで

明日午後四時、駅前の交差点で待ってるよ。

なんか最近、事故があったみたいだから、

気を付けてねー」

立川「・・・」

相見の声「あれ、聞こえてる？もうケガ人だしたくなかったら・・・絶対来いよ」

電話が切れる。

伊織と裕子、入ってくる。

裕子「二人居たの？ってえ」

伊織「立川なにしてんの？」

立川「航が」

別府「ボコボコにされて」

伊織「きやつ」

裕子「その子が私達助けてくれたんだ、連れてかれるの助けてくれたんだよ！」

伊織「嘘でしょこんなの」

別府「電話誰だった？」

立川「あいつらだよ」

救急車のサイレンが聞こえる。

別府「あーあ、だりいなー。裕子、航のこと

頼んだわ」

裕子「ちょ、待ってよ」

立川「南、その傷・・・家でじっとしてろよ」

伊織「・・・」

立川と別府、店を出ていく。

○商店街（夜）

別府と立川、歩いている。

別府、ポケットに入っていたタバコを

思いだし、吸いだす。

別府「ふー」

立川「俺にも一本くれよ」

別府「まだ高校生だろ？」

立川「・・・お前もだろ？」

別府「・・・そうだな、高校生だったわ」

別府、立川にタバコを一本渡して火をつける。

立川「サンキュ」

別府「前にさ、ここで立川が喧嘩してるの見たことあって、やべー奴いんなって思いながら転校してきたんだよね」

立川「・・・」

別府「でもさ、そんなに・・・」

立川「俺不器用だから、上手く喋れないんだけどよ」

別府「・・・おう」

立川「こういう見た目で、よく喧嘩売られて買ってたら、学校内で恐がられてよ」

別府「うん」

立川「気付いたら一匹狼になってた。でも、文太だけは普通に話しかけてくれたんだ」

別府「・・・」

立川「あいつに一回聞いたことあんだよ」

別府「え」

立川「何で俺に話しかけたんだって」

別府「うん」

立川「そしたら『小さいころ犬に噛まれてケガしたけど、将来は獣医師になりたい、そんな感じかな』だってさ」

別府「そっか」

立川「よくわかんねーんだけどさ」

別府「文太らしいじゃん」

立川「・・・俺何でこんなベラベラ喋ってるだろ」

別府「え？」

立川「別府の事よく知らねーのに」

別府「何でだろうな」

○別府宅

別府、部屋を出ていく。

閉まるドアに、外国人のセクシーなポスターが貼ってある。

○道

立川、歩いている。

○裕子宅

裕子、ベッドに横になっている。

○ピザ屋

伊織、バイトしている。

○道

別府と立川、交差点に向かって歩いている。

○同・交差点

別府と立川、待っている。

別府「どんな高級車でくるんだ」

立川「さあな」

軽トラが一台やってくる。

別府「見覚えある？」

立川「覚えてねーよ」

不良5、運転している軽トラで迷わず
突っ込んでくる。

別府「あれだ！」

二人、軽トラの両サイドから荷台に乗り込む。

車の運転が荒く振り回される。

が、囲いがあるので落ちはしない。

車が停まり荷台を上げ始める。その先には道路工事現場、深く掘ってある。

別府「おいおい、うそだろ」

荷台が上がりきったまま動き出す。

立川「やべえ」

二人、足が地面に着いたり着かなかったり。落ちはずに何とか粘っている。

別府「立川大丈夫か？！」

立川「畜生！」

しばらくして車が停まる。

別府と立川、荷台から降りる。

別府「ここ何処だ？」

不良5、逃げようとするが、立川にぶ

っ 飛ばされる。

立川、不良5の靴を奪って履き替える。

立川の靴は踵がなくなっている。

○花やしき・入口

別府と立川、立っている。

相見と二階堂、不良達が園内に居る。

立川「勝負はこれからってわけか」

佐野、横から出てくる。

別府「佐野？」

佐野「おとなしく入院してればいいのに」

別府「は？」

立川「新参者が」

別府「新参者？」

立川「あいっつも転校生だよ」

別府「え？」

立川「転校初日にいきなり生徒会入ってきた
って誰かが言ってた」

別府 M「まてよ、もしかして・・・あいっつも
俺と同じ」

佐野「ガキがしぶとすぎなんだよ」

別府「・・・あの野郎」

佐野ユウ(17じゃなく21)だった。

佐野「僕の将来の為に、消えてもらいます」

不良達、笑う。

別府「それだけの為に」

佐野「それだけ？これだからバカは。ヒューマンエラーヒューマンエラー」

不良達、笑う。

別府「俺ら何もしないだろ」

佐野「ビビらず学校に来るから我慢できなくてさ」

別府「金でそいつら動かしてぶっ潰そうってか？」

相見「仕事だよ。最近はさ、頭も使っていないと」

別府「殿見の田中って奴も、文太もか」

佐野「何かが起きる前に対処する、基本です」

不良達、笑う。

黙ってた立川が喋りだす。

立川「周りの共感は得られたか？」

佐野「あ？」

立川「言いてえ事は終わりがあって聞いてんだよ」

佐野「くっ、やれ！」

相見「へへ、やっぱあいつ強そうだな、二階ちゃん、もう一人はよろしくね」

二階堂「うっす」

別府と立川、園内に突っ込む。

二人「おりやあああああ！」

○裕子宅・前

裕子、走っている。

○ピザ屋

伊織、バイトしている。

後輩「あ、南先輩、そこ違いますよー」

伊織「あ、ごめん。ボーっとしてて」

後輩「・・・文太さん、キャラじゃないのにどうしたんですかね」

伊織「・・・ね」

後輩「私が言うのもなんですけど」

伊織「うん」

後輩「男ってバカですよね」

伊織「そうだね」

後輩「聞いてくださいよ、こないだ弟が」

○花やしき・園内

別府と立川、暴れている。

次々に不良達を倒していく。

殿見の田中が、殿見生達に神輿で担が
れながらやってくる。

立川「あれ」

別府「無理しちゃって」

田中「殿見の底力、見せてやれー！」

殿見生達「うおおおおお！」

田中、神輿を担ぐ奴が居なくなって落
ちる。

田中「うおおおおお！」

別府、ジェットコースターに乗りなが

ら隣の不良を殴っている。

立川、スワンの上で殴って、不良を水に落とす。

別府と立川、ビックリハウスに不良達をまとめて押し込み、頭クラクラして出てきたところを、まとめてぶっ飛ばす。

色んなところで、色んなアトラクションで、喧嘩している。

○同・お化け屋敷

別府と立川、それぞれ喧嘩している。

航の姿が見えて、

別府「お、おい立川、こっち」

立川「どうした？」

別府「おばけがいる」

立川「おばけ？」

別府「うわああああ！」

立川「どうした」

二人、お化け屋敷から出ていく。

○同・同・前

別府と立川、出てくる。

別府「やめてくれ」

航、歩いてくる。

日に当たったところで見ると、普通に
生きている航。

航「立川さん、やっぱここに居た」

立川「おう」

航「暴走している車がいるって聞いて」

立川「身体大丈夫なのか？」

航「なんか酸素足りてなかっただけみたい
で、酸素吸ったら速攻で治りました」

別府「包帯グルグル巻きでお化け屋敷入って
くんじゃねーよ」

別府、航をぶっ飛ばす。

航、田中の隣に倒れる。

立川「まだ大丈夫じゃねーな」

別府「立川」

別府、首で先を指す。

相見と二階堂、立っている。

○道（夕）

裕子、走っている。

伊織、ピザ屋のバイクで走っている。

裕子、伊織を見つける。

裕子「え、伊織？なんでバイク？ちょっと待ってよー！航もつと早く連絡しろよ」

○花やしき・園内（夕）

別府と立川、相見と二階堂、歩み寄る。

立川「そこで見てろお前ら」

別府「あいつらには借りがある」

相見「来いよ、立川」

二階堂「ふんふんふん」

四人、喧嘩が始まる。

航「立川さん、立ってるのがやっとなんじや」

○同・同・立川サイド（夕）

立川と相見、激しい喧嘩。

立川「俺らに喧嘩売ったこと後悔すんなよ」

相見「後悔？したことねーよそんなもん」

立川、押され気味、

立川「やべ、頭グラグラだ」

立川、相見の右ミドルキックを受ける。

立川、相見の右脚を離さないが吐血する。

立川「一回ぐらいしといた方がいいぞ」

相見「は？」

立川「違う世界が見えっから」

相見M「やば、足が抜け」

立川「医者言う事は、ちゃんと聞きましようね」

相見、立川の渾身の右ストレートに倒れる。

伊織、やってくる。

伊織「ねえ！」

立川「え、南？なんでヘルメット？」

伊織「私を配達してきた」

立川「・・・あっそ」

○同・同・別府サイド(夕)

別府と二階堂、激しい喧嘩。

別府「今までは年齢差で何とかなってただけか、レベル違うわ」

二階堂「どうした、チェリー野郎」

別府、ボディブローをもらう。

別府「吐きそう、こんな辛いことしてまで」

別府M「あれ？俺どうして教師になりたいんだっけ？」

別府、防戦一方。

二階堂「ふんふん」

別府M「必死こいて勉強して大学入ってまで、どうしてなろうと思ったんだ」

二階堂「早く、くたばれ」

別府M「あそうか、消去法だ、他にやりたいことなんてなかったんだ」

別府「別にいいじゃねえかよ」

別府、二階堂のパンチを止める。

別府「なって辞めたきや辞めてやるよ」

別府と二階堂、再び激しい喧嘩

二階堂「チェリー、のくせに」

別府「言っとくが俺はただのチェリーじゃねえ」

二階堂「ん？」

別府「アメリカンチェリーだバカ野郎！」

別府、回し蹴りで二階堂を倒す。

裕子、やってくる。

別府「え、裕子？」

裕子「・・・」

裕子、無言で別府をツンツンする。

別府「いた、痛いって」

○同・同・階段（夕）

佐野、座って笑っている。

別府と裕子、立川と伊織、やってくる。

文太、パンダカーに乗ってくる。

文太「どうしたよ佐野、そんなリンリン気分
だよ」

別府「リンリン気分じゃなくてルンルン気分

な」

文太「佐野生徒会長、ランラン気分で調子良
さそうだな」

別府「だからルンルンな、さっきからパンダ
の名前みてーじゃねーか」

立川「白黒はつきりつけようぜ」

文太「パンダだけにな」

伊織「大丈夫なの文太」

裕子「航と一緒に来たらしいけど、身体動か
ないんだってさ」

佐野「相見と二階堂まで、くそ」

立川、佐野の方に歩いていく。

佐野「今の、お前ぐらいなら、俺だって」

立川、佐野の胸ぐらを掴む。

佐野「ちょ、ちょっと待ってくれ。か、金な
らいくらでもやるからよ」

立川「行くぞ」

佐野、宙に浮く。

佐野「わ、悪かった。や、辞めてくれー！」

文太「耳塞げ」

立川、怒号一発。

佐野、泡吹いて倒れる。

別府「大声だけ」

文太「勝てねーわこりゃ」

五人、夕日に包まれる。

○同・入口（夜）

立川と伊織、別府が文太を抱えて裕子と、五人で歩いている

立川、倒れそうになり、伊織にもたれかかる。

伊織「大丈夫？」

立川「・・・大丈夫・・・じゃない」

伊織「・・・そっか」

立川「送ってってくれ」

伊織「うん」

別府と文太、裕子がその様子を見ている。

別府「俺ら、文太病院に送ってくるわ」

裕子「もう無理しないように、ちゃんと見張

らないとね」

別府「じゃあな」

裕子「伊織も立川の事見張っとくんだよー」

別府と文太、裕子が去っていく。

文太、無言の背中で手を振る。

立川「っへ」

伊織「行こっか」

○商店街（夜）

別府と裕子、文太を病院に送り届け帰っている。

別府「・・・」

別府M「大学生と高校生、やっぱまずいかな」

裕子「・・・」

別府「なんか18歳から成人になるらしいよ」

裕子「そうみたいだね」

別府「・・・あのさ」

裕子「別府はさ、年上の女性と年下の女性どつちが好き？」

別府「年下、断然年下っしょ。もちろんタメ

でも全然おっけ」

裕子「ふーん」

別府「え、なに」

裕子「ロリコン」

裕子、走っていく。

別府「おい、なんだよー！」

○電車・車内（夜）

立川と伊織、座っている。

伊織「遅くなっちゃったね」

立川「おう」

窓に二人の顔が反射する。

伊織「ひどい顔」

立川「本当だな」

駅に着き、車内放送が流れる。

放送「この電車は車庫行きの為、この先ご乗

車になれません、お気をつけ下さい」

伊織「え、うそ、もうそんな時間？」

立川「動けねーよ」

車掌が車内チェックをしにくる。

車掌「お客様、降りてくださいーい、終点です」

立川、車掌と目が合う。

車掌は、ばあちゃんにクラクションを
鳴らした、あの時の運転手。

車掌、電車から降りる。

車掌「チェックよし、発車」

電車、ドアが閉まり動き出す。

伊織「え、え、いいの」

立川、伊織の手を握る。

立川と伊織、まだ座っている。

車内の電気が消える。

電車の窓にはもう、顔は反射しない。

外が良く見える幻想的で懐かしい風景。

立川「ごめん」

伊織「え？」

立川「そのキズ」

伊織「・・・大丈夫だよ」

立川「伊織の事、守れなくてごめん」

伊織「・・・もう守んなくていいよ」

立川「え？」

伊織「守んなくていいからさ・・・恭介」

伊織、立川を見つめる。

立川「・・・」

伊織「奪ってよ」

街のネオンが少し差し込む車内。

立川、伊織にチューをする。

○北岡高校・3年1組

英語の授業中。

立川、寝ている。

○同・校庭

体育祭。

ゼッケンが結べない文太を手伝うクラ

スメイト。

重たい荷物を持ってあげる立川。

みんなで綱引き。

○同・3年1組

立川、掃除をしている。

○同・体育館

一学期終業式。

○同・廊下

騒いでいる生徒達。

別府 M 「消去法じゃ、ないのかもな」

別府、一人で帰っていく。

立川、その様子を見ている。

○別府宅（朝）

別府、ドアを叩く音に目を覚ます。

別府 「なんだ」

○同・玄関

別府、ドアを開ける。

川古が居て、

川古 「よっ」

別府 「またお前かよ」

川古 「川古史也です」

別府「なんだよ、ってかインターホン使えよ」

川古「そう言わさんなって、今晚空いてる？」

別府「今晚？なに麻雀？」

川古「違う」

別府「ボウリング？」

川古「違う」

別府「・・・合コン？」

川古、インターホンを押す。

別府「え？」

川古「だから合コンだって」

別府「マジで？本当に合コン？」

川古、再度インターホンを押す。

別府「うそ」

川古「前回中止になった足立大学の、人数集

まったから改めて開催です」

別府「俺たちの青春は終わってなかったか」

○居酒屋（夜）

別府と川古含め、男4人座っている。

大学生1「ちゃんと来たな別府」

大学生 2 「前回の事あんだから被ったら譲れ

よな」

別府 「悪かったって」

川古 「あ、きた」

女子 4 人到着。

女子 1 「お待たせー」

女子 2 「遅れてすみません」

女子 3 「初めましてー」

大学生 1 「むっちゃ可愛いじゃん」

大学生 2 「さすが足立大学」

裕子 「すみません遅くなり」

別府と裕子 (17 じゃなく 21)、目が合う。

二人 「あー！」

○通学路

桜が散っている。

校長 N 「別府智治殿、この度は、わが校の教員採用試験を受けていただき、誠にありがとうございます。各先生方に確認したところ、勉強へのモチベーションに、変化は見

られませんでした」

○北岡高校・3年1組

校風が『自由・個性・協力』になっている。
いる。

校長N「しかし、以前に比べて生徒達が、協調性を身に着けたと報告がありました。

我々としても初めての試みだったので、まー合格という事にしまーす。うちで良ければきてくださーい」

立川、窓の外を見ている。

文太、やってきて、

文太「恭介見ろよコレ」

文太、卒業アルバムを開く。

3年1組の集合写真に、吹き出しで追加された別府の写真。

立川「なんでスーツ着てんだ」

文太「な、急に居なくなっと思ったたら」

伊織、やってきて、

伊織「見てみて、裕子が映ってるの」

文太「本当だ、別府と一緒にスーツじゃん」

伊織「え、別府も映ってるの」

立川「・・・何してんだか」

《完》